

殺生をめぐるガワンタシの見解*

矢ノ下 智也

1 序

仏教における不善業の一つに殺生がある。当然のことながら、殺生は、悪趣への転生をもたらすため避けるべきである。しかし、そのような殺生が、特定の場合に容認されるかのような記述が仏教文献に確認される。例えば、『菩薩地』(*Bodhisattvabhūmi*)「戒品」では、菩薩が、無間業を実行する恐れのある強盗を悲 (*karuṇā*) を動機として殺害したとしても、違犯となることはなく、むしろ菩薩には多数の福德が生じる、と論じられている¹。船山 2020: 27 によれば、この殺生は功德を生み出すため、肯定されるべき行為である²。この考えは、大乘仏教論書の中で定説となる³。

この悲を動機とする殺生に関して、後代のゲルク派の学僧セ・ガワンタシ (*bSe ngag dbang bkra shis*: 1678–1738) は、『縁起大論』(*rTen 'brel chen mo*) において、「意思 (*bsam pa*, **āśaya*) が白く、白い異熟をもたらすものであるため、その殺生は善業である」と述べる。彼はアサンガ (*Asaṅga*: ca. 300–405) の『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccaya*) で論じられる黑白業の理論を応用しこのような理解を示す⁴。さらに、ガワンタシは悲を原因とした殺生だけでなく、対象を誤った殺生についても問答を与えている。この殺生について、ガワンタシは、ツォンカパ・ロサンタクパ (*Tsong kha pa blo bzang grags pa*: 1357–1419) の『道次第大論』(*Lam rim chen mo*) に立脚し、デーヴァダッタを殺害する意思を持ったある人が、誤ってヤジュニャダッタを殺害した場合、その人に罪が発生することはないと述べる。彼の見解は、『俱舍論本頌』(*Abhidharmakośa*) における定義とも合致する⁵。

本論文では、インド仏教文献における悲を動機とする殺生をめぐる例を確認し、その内容を整理する。それを踏まえた上で、ガワンタシが『縁起大論』の中で与える悲を原因とした殺生と対象を誤った殺生に関する問答の分析を通して彼の理解の特徴を明らかにし、ガワンタシの業理論の本質に迫りたい。

2 インド仏教における悲を動機とする殺生

これまで多くの研究によって指摘がなされているように、大乘仏教によれば、菩薩は悲を動機として悪人を殺害する。その菩薩による殺生を論じる際に多く引用されるのが、『菩薩地』「戒品」の以下の場面である。

BBh 113.17ff.: *asti kiñcit prakṛtisāvadyam api [yad] bodhisattvas tadrūpeṇopāyakauśalyena sam-*

*本論文は Yanoshita 2024 (forthcoming) を和文にした上で、改稿したものである。また、本論文作成にあたり、JSPS 科研費 21J20283 の助成を受けた。

¹Tatz 1986: 70ff.、藤田 1995、Jenkins 2010, 2011、船山 2020: 25ff. などを参照。

²一方、東アジア仏教における菩薩戒が規定される『梵網経』では、菩薩はいかなる場合であっても殺生を行ってはならず、『菩薩地』のような悲を動機とした殺生は容認されていない。仮にそのような殺生を菩薩が行う場合、その菩薩は波羅夷罪となり、菩薩としての資格を失うことになる。詳しくは船山 2023: 32, 76 を参照。

³杉木 2018: 258 を参照。

⁴黑白業をめぐる一連の議論については矢ノ下 2023 を参照。

⁵この定義については後述する。

この場合、その菩薩が違犯者となることはなく、むしろ彼には福德が生じるのである¹¹。『菩薩地』の記述に従えば、菩薩による悪人殺生によって、菩薩が違犯者にはならない。なぜなら、その殺生は、善心あるいは無記心、さらには憐れみの心という動機によって実行されたからである¹²。しかし、これは当該の殺生が性罪ではないことを意味しているのではない¹³。むしろ、その殺生は、確かに性罪であるのだが、それを遥かに上回るほどの福德を生み出すと考えるべきであろう。さらに、『菩薩地』の別の箇所では、義務的行為を実行している者にとって、その行為が違犯になることは理に合わないとも述べられている。その理解に従えば、菩薩による悪人殺生は菩薩にとって義務的行為であると言えよう¹⁴。アサンガが『菩薩地』において示す見解と同様の見解が中観派

¹¹ ツォンカパは当該箇所を次のように注釈している。 *Byang chub gzhung lam* 78a2ff. (cf. Tatz 1986: 241):
སློབ་གཙོན་གཞན་བ་ལ་ཡུལ་ནི། ཉམ་རང་བྱང་སེམས་བརྒྱ་ཡག་མང་པོ་དག་ཟང་ཟེང་བྱང་བྱང་གྱི་ཕྱིར་གསོད་པར་ཆད་དེ་མཚམས་མེད་པའི་སློབ་
བ་ལ་ལྷགས་པའི་ཚོམ་རྒྱུ་སློབ་སློབ་སློ། བསམ་པ་ནི། དེ་ལྟ་བུ་མཐོང་བ་ན་འདི་བསད་ན་བདག་དཔུལ་བར་སྐྱེ་མོད་ཀྱི་དེ་ནི་སློབ་སེམས་ཅན་
འདི་མཚམས་མེད་བྱས་ནས་དཔུལ་བར་འགོ་ན་མི་རུང་ངོ་སྤྲོམ་དུ་ཕྱི་མ་ལ་སྤྱིང་བ་ཚེ་བའི་སེམས་ཁོ་ན་ཉེ་བར་བཞག་པ་སྤྲོ་བདག་གཞན་བརྗོད་པོད་
པའོ། ། གསོད་པའི་དུས་ན་རང་གི་སེམས་དག་བ་དང་ལུང་མ་བསྟན་གང་རུང་གི་སེམས་སྤྲུ་གཞན་གྱི་ཉོན་མོངས་སློབ་སློབ་ཡེ་མི་འདྲེ་བར་རིག་པ་
དགོས་སོ། །...དེ་ལྟར་སློབ་དང་བུལ་ན་ཉེས་པ་མེད་ལ་བསོད་ནས་ཀྱང་མང་དུ་འཕྲེལ་བའོ། ། (「殺生が許可された場合について、対象は次のものである。幾千もの声聞、独覚、菩薩を財物のために殺害すると決めて無間〔業〕の着手 (sbyor ba) へと向かっている強盗などである。意思是次のものである。そのような人を目撃したときに、彼を殺害すれば私は地獄へ生まれるが、それはかまわない。しかし、この人が無間〔業〕を為して地獄に行ってしまうとはならないと考えて、来世 (phyi ma) に対する悲の心のみを定めて、自他の交換を可能にするのである。殺生時に、自身の心が善心あるいは無記心のいずれかに定まっているのであって、決して煩惱などが全く混在していないことを確認しなければならない。... [中略] ... そのようなやり方で殺害 (srog dang bral, lit. 「命から離れる」) しても、過失はない。むしろ、多数の福德資糧が広がるのである。)」

¹² Sugiki 2020: 10; 杉木 2020: 303ff. によれば、菩薩が殺生によって罪ある者のとならず、むしろその殺生によって多くの福德が生み出されるためには、次の七つの条件が揃っていなければならない。[1] 自分が菩薩であること、[2] 殺生対象者 X が無間業を実行しようとしており、このままでは X と X によって殺害される者たちが地獄へ転生してしまう、[3] 自分自身が X を殺害することこそ、X を含め全員を救済する手段、[4] 自分自身は X を殺害し、その報いとして地獄へ転生する覚悟がある、[5] 殺生をはたらく際の心の状態が、善もしくは無記である、[6] ためらいつつも X を殺害する、[7] X とその他全員の来世に対する憐れみの心にもとづいて、X を殺害する*。*杉木 2020: 304 の表現を一部変更した。

¹³ ただし、サーガラメーガによれば、悪人殺生は、当該の菩薩にとって性罪にならない。BBhV D 4047, 167a7ff.: ཉམ་མོས་ལ་ལྷོས་ནས་གྲགས་པའི་སློབ་སློབ་རང་བཞིན་གྱི་ཁ་ན་ཐོ་བ་དང་བཅས་པ་ཞེས་བུལ། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྣམས་ཀྱི་དེ་
རང་བཞིན་གྱི་ཁ་ན་ཐོ་བ་དང་བཅས་པ་ཉིད་མ་ཡིན་ཏེ། ཉོན་མོངས་ཅན་མ་ཡིན་པའི་སེམས་ཀྱིས་བྱེད་པའི་ཕྱིར་ལོ། ། (「声聞を考慮して、常識的な観点から性罪が〔ある〕と述べているのである。諸菩薩には、それ（悪人殺生）は決して性罪ではない。なぜなら、不染汚なる心によって〔それを〕実行するからである。)」

¹⁴ BBh 125.9ff. (cf. 藤田 1991: 22) : nāsti ca bodhisattvasyāpattimārge niravaśeṣā āpattiḥ | yad api coktaṃ bhagavatā yadbhūyasā bodhisattvasya dveṣasamutthitā āpattir jñātavyā na rāgasamutthiteti tatrāyam abhiprāyo draṣṭavyaḥ | bodhisattvaḥ sattvānunayaṃ sattvapremādhīpatiṃ kṛtvā yat kiñcic ceṣṭate sarvaṃ tad bodhisattvaḥkrīyam | nākṛīyam | na ca kṛīyam kurvataḥ āpattir yujyate | sattveṣu tu dviṣṭo bodhisattvo nātmano na pareṣāṃ hitam ācarati | na caitad bodhisattvaḥkrīyam | evam akṛīyam kurvataḥ āpattir yujyate | (「そして、菩薩の違犯の道において、全面的な違犯は存在しない。また、それは、『菩薩の違犯は、その大部分が怒りから発生したものであり、愛着 (rāga) *から発生したのではないと知るべきである。』と世尊が述べた通りである。そこ (世尊の発言内容) には、次のような意図があると理解すべきである。菩薩が衆生への愛 (anunaya)、すなわち衆生への慈しみの心 (preman) を増上力 (adhipati) としてから、何らかの振る舞いをするならば、それは全て菩薩にとって義務的行為である。そして、〔これは〕非義務的行為ではない。義務的行為を実行しているものにとって、違犯となることは理に合わない。しかし、衆生たちに敵意を向けている菩薩たちが、利益を生み出すことはあるが、それは自己のためにも他者のためにもならない。そして、これは菩薩がなすべきことではない。このように、非義務的行為を実行している者にとって、違犯となることは理に適っている。)」 対応するチベット語訳と漢訳は次のとおりである。 D 4037, 98a5ff.: བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལའི་
ཉེས་པའི་ལམ་ལ་ཡང་ཉེས་པ་ལྷག་མ་ཡང་མེད་པ་ནི་མེད་དེ། བཅོམ་ལྷན་འདས་ཀྱིས་བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལའི་ཉེས་པ་ནི་མཁའ་ལྷོ་སྤང་ལས་
འབྱུང་གི་འདོད་ཆགས་ལས་བྱུང་བ་ནི་མ་ཡིན་པར་ཤེས་པར་བྱོལ་ཞེས་གང་གསུངས་པ་དེ་ལ་དགོངས་པ་ནི་འདི་ཡིན་པར་བཟླ་བར་བྱ་སྟེ། བྱང་
རྒྱལ་སེམས་དཔལ་སེམས་ཅན་ལ་ཇེས་སྤྲུ་ཆགས་ཤིང་སེམས་ཅན་ལ་བྱམས་པའི་དབང་དུ་བྱས་ནས་གང་ཅི་སྤྱོད་ཀྱང་རུང་དེ་དག་ཐམས་ཅད་ནི་བྱང་
རྒྱལ་སེམས་དཔལ་བྱ་བ་ཡིན་ཏེ། མི་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ་ལ་བྱ་བའི་རིགས་པ་བྱེད་པ་ནི་ཉེས་པར་འགྱུར་བ་མི་རིགས་སོ། ། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་

のバーヴィヴェーカ (Bhāviveka, ca. 490–570) 著『思釈炎』(Tarkajvālā) にも確認される¹⁵。

3 ガワントシの見解

3.1 悲を動機とした殺生

ガワントシは『縁起大論』において、殺生に関する問答を展開している。まず最初に確認するのは悲を動機とした殺生に関する問答である。当該の問答において、ある者が次のような疑問を提示する。

ཡང་ཁ་ཅིག་གིས། ངོ་བོ་དཀར་ལ་རྣམ་སྤྲིན་རྣམས་པའི་ལས་དང་། ངོ་བོ་ནག་ལ་རྣམ་སྤྲིན་དཀར་པའི་ལས་ཞེས་པ་
ཡང་མི་འབྲན་ཟེར་ན། (rTen 'brel chen mo 141b3ff.)

またある者が次のように述べる。「白い本性を有していながら黒い異熟を有する業、あるいは黒い本性を有していながら白い異熟を有する業も妥当しないことになる。」

ここである者は、業の本性と異熟の関係についての見解を提示している。彼によれば、白い本性を有していながら黒い異熟をもたらす業、あるいは黒い本性を有していながら白い異熟をもたらすような業は存在しない。つまり、彼は白い本性を有している業は白い異熟をもたらす、黒い本性を有している業は黒い異熟をもたらすと考えている。彼にとって、業の本性とその業によってもたらされる異熟の性質は必ず一致していなければならないということである。この見解に対して、回答者はその誤りを指摘する。

མེས་ཅན་རྣམས་ལ་མྱེང་བ་ནི་བདག་དང་གཞན་རྣམས་ལ་ཕན་པར་སློབ་པ་མ་ཡིན་ལ། དེ་ཡང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་བྱ་བ་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་ལྟར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ་བྱེད་པ་ནི་ཉེས་པར་འགྱུར་བར་རིགས་སོ། ། T 1579, 521b19ff.: 又於菩薩犯戒道中。無無餘犯。如世尊說。是諸菩薩多分應與瞋所起犯。非貪所起。當知此中所說密意。謂諸菩薩愛諸有情。憐諸有情增上力故。凡有所作一切皆是菩薩所作。非非所作。非作所作可得成犯。若諸菩薩憎諸有情嫉諸有情。不能修行自他利行。作諸菩薩所不應作。作不應作可得成犯。*サーガラメーガによれば、この場合の rāga とは、衆生に対する愛のことである。BBhV D 4047, 137b5ff.: འདོད་ཆགས་ནི་འདྲིར་སེམས་ཅན་ལ་རྗེས་སུ་ཆགས་པ་ཡིན་པར་བསྟན་ཏེ། མེས་ཅན་ལ་བྱམས་པ་དེའི་སློབ་པ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་གང་ཅི་སློབ་ཀྱང་རྩལ་དེ་དག་ཐམས་ཅད་ནི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་བྱ་བ་ཉིད་ཡིན་ཏེ། མེས་ཅན་གྱི་དོན་དུ་གཏོགས་པའི་ཕྱིར་བྱས་ན་ཡང་ཉེས་བྱས་སུ་ནི་མི་འགྱུར་གྱི། ཅིར་འགྱུར་ཞེ་ན། ལེགས་པར་བྱས་པ་ཉིད་དུ་འགྱུར་རོ། ། དེ་བས་ན་འདོད་ཆགས་ལས་འབྱུང་བ་ནི་ཉེས་པ་མ་ཡིན་ཞོ། ། (‘dod chags というのは、目下の文脈では衆生に対する愛 (sems can la rjes su chags pa) であると示しており、衆生に対するその慈しみの心 (byams pa) によって、菩薩がいかなる行動をしたとしても、それらは全て菩薩にとって義務的行為であり、衆生に寄与するために〔それを〕なしたとしても悪行をなしたことにはならない。では、どうなるのかといえば、善〔行〕をなしたことになるのである。そういった理由から、「愛着から発生する〔行為〕」は、違犯にはならない。)

¹⁵TJ D 3856, 187a3ff.: གང་གཞན་དག་མཚམས་མེད་པ་བྱེད་པ་ལ་མངོན་པར་ཕྱོགས་པར་མཐོང་ནས། དེ་ནི་ལས་དེས་ཡུན་རིང་དུ་སྐྱུག་བཟུལ་བར་འགྱུར་རོ་སྟེ་རྣམས་རྣམས་སྤིང་རྗེས་དེ་དག་གིས་དཔའ་བྱེད་པ་ནི། བདག་ཉིད་དཔུལ་བར་སྐྱེ་བར་ངེས་པར་ཤེས་ཀྱང་དེ་བསྐྱབ་པའི་ཕྱིར་དགོ་བ་འཇུག་དུ་མ་བསྟན་པའི་སེམས་ལ་གནས་པར་བྱས་ནས་གསོད་པར་བྱེད་དེ། བདག་ཉིད་དཔུལ་བར་སྐྱེས་པ་ནི་འདོད་ཀྱི། འདི་སྐྱུག་བཟུལ་ཆེན་པོ་དང་ཡུན་རིང་དུ་ལྡན་པར་མ་གྱུར་ཅིག་ཅེས་བྱ་བ་དེ་ལྟར་བྱེད་པའི་སེམས་ཀྱི་ཀྱན་ནས་བསྐྱངས་པ་ཉིད་ནི་དགོ་བ་ཡིན་ཏེ། གང་གི་ཕྱིར་མ་ཆགས་པ་ལ་སོགས་པའི་སེམས་དང་མཚུངས་བར་ལྡན་པའི་ཕྱིར་རོ། ། (「他の人が無間〔業〕へと向かっていくのを目撃した上で、『彼はその業によって長期間苦しむことになるだろう』と考えた上で、悲によって彼を殺害する人(菩薩)は、まさに自分自身が地獄へ生まれることを確信しているが、彼を救済するために善心や無記心にもとづいて殺害するのである。「自分自身が地獄へ生まれても構わないが、この人が大きな苦しみを長期間背負うことになってはならない。」というような善心に動機づけられたまさに〔その殺生意図は〕善性のものである。なぜなら、〔当該の殺生意図は〕無貪 (ma chags pa) の心などと相応するからである。」) Eckel 2008: 187: “Others see someone on the verge of committing a heinous crime (ānantarya), know that this action will cause suffering for long time, and kill that person out of compassion. They certainly know that they will be born in hell, but they adopt a wholesome or indeterminate (avyākṛta) motivation (citta) and kill in order to protect [others]. They accept their own rebirth in hell, but their wholesome [motivation] is sustained by wholesome thoughts like: “This is great suffering, but it will not last long” This [motivation] is wholesome, because it is like a thought that is free from desire and so forth.”

ཀུན་བདུས་ལྟར་ན་འདི་ལྟར་བཤད་ཀྱང་འགལ་བ་མེད་པར་ཐལ། ཀུན་བདུས་ལས། བསམ་པ་ནག་ལ་སྒྱུར་བ་དཀར་བའི་ལས་དང་བསམ་པ་དཀར་ལ་སྒྱུར་བ་ནག་པའི་ལས་ཞེས་བཤད་པ་དང་མཐུན་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། འདིའི་བསམ་པ་ནི་རྒྱུའི་ཀུན་སྒོར་དང་སྒྱུར་བ་དངོས་གཞི་ལ་བཤད་དངོས་པ་གང་ཞིག །དེ་ལྟར་ན་དོ་བོ་དཀར་ནག་ལས་དཀར་ནག་ལ་བཤད་མི་དགོས་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། (rTen 'brel chen mo 141b4ff.)

【回答者】[a] 『〔阿毘達磨〕集論』にしたがうと、このように説明されていても矛盾はないことになる。[b] 『〔阿毘達磨〕集論』における、「〔黒白業とは〕意思の観点から見ると黒であるが実行の観点から見れば白である業あるいは、意思の観点から見ると白であるが実行の観点から見れば黒である業」¹⁶という説明と一致するゆえに。[c] そうである（『〔阿毘達磨〕集論』で、「意思は黒であるが実行は白である業、あるいは意思は白であるが実行は黒である業」という説明と一致する）ことになる。[d-1] 目下議論になっている「意思」とは、原因としての共起物 (rgyu'i kun slong, *hetusamutthāna)¹⁷を指しており、一方、実行とは根本 (dngos gzhi, *maula) [業道] を指していると解釈すべきであり¹⁸、なおかつそれにしたがうならば [d-2]、白・黒の本性が白・黒業であることを指していると必ずしも解釈すべきではないゆえに。[e] そうである（[d-1] 目下議論になっている「意思」とは、原因としての共起物を指しており、一方、実行とは根本 [業道] を指していると解釈すべきであり、なおかつそれにしたがうならば [d-2]、白・黒の本性が白・黒業であることを指していると必ずしも解釈すべきではない）ことになる。

ここで回答者は、『集論』の黒白業の理論に依拠して質問者の見解を退けている。前節にて明らかにしたように、『集論』の体系では、ある業に関する (1) 意思 (bsam pa, *āśaya) が白く、実行 (sbyor ba, *prayoga) が黒い場合、あるいは (2) 意思が黒く、実行が白い場合、その業は黒白業として規定され¹⁹、さらに、その業は、善業 (1) と不善業 (2) の二つに区分される²⁰。回答者は、『集論』に立脚し、目下議論になっている「意思」を「原因としての共起物」、「実行」を「根本」(dngos gzhi, *maula) [業道] と言い換えて議論している。それに従えば、白い本性、あるいは黒い本性を有しているからといって、その業が必ずしも白い異熟をもたらす業や黒い異熟をもたらす業として解釈すべきではない。つまり、回答者は、白い本性を有していながら黒い異熟をもたらす場合もあれば、黒い本性を有していながら白い異熟をもたらす場合があるということを描しているのである。その中でも、後者の例として悲を動機とした殺生をあげている。

དཤེར་ན། མི་ནག་མདུང་ཐུང་ཅན། དེད་དཔོན་སྤྱིང་ཇེ་ཅན་གྱིས་སྤྱིང་ཇེས་ཀུན་ནས་བསྐྱངས་ཏེ། བསད་པའི་ལས་དེ་བསམ་པ་དཀར་ལ་སྒྱུར་བ་ནག་པའི་ལས་ཀྱི་མཚན་གཞི་གང་ཞིག །ལས་འདི་དག་པ་ཡིན་པས་ལས་དཀར་པོ་ཡིན་ཡང་དངོས་གཞིའི་སྒྱུར་བའི་སྒྲོ་ནས་ནག་པོ་དང་དངོས་གཞིའི་སྒྲོ་ནས་ནག་པོ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཏེ། མ་གྲུབ་ན་ཀུན་བདུས་དང་འགལ་བའི་ཕྱིར། (rTen 'brel chen mo 141b5ff.)

[f] 例えば、短剣を持った悪人 (mi nag mdung thung can) をカールニカという名の船長 (ded dpon snying rje can, *kārṇikasārthavāha) が悲に動機づけられて殺害するとき、その業は、意思の観点から見れば白であるが、実行の観点から見ると黒である業という概念規定を受ける主題 (mtshan gzhi) であり、なおかつ目下の業は善であるので白業であっても、実際の実行の

¹⁶AS 235.20ff.: āśayataḥ kṛṣṇaṃ prayogataḥ śuklaṃ, prayogato vā kṛṣṇaṃ āśayataḥ śuklaṃ |

¹⁷「共起物」(kun slong, *samutthāna) には、「原因としての共起物」と「同時的な共起物」の二つがあり、ここでは前者を指していると考えられる。「共起物」に関しては、p. 32, fn. 14 を参照。

¹⁸prayoga 「実行」をめぐる『俱舍論』、『集論』註釈とガワンタシの理解は、p. 38, fn. 21 を参照。

¹⁹AS 234.19ff. を参照。

²⁰ASBh においてそのような説明がなされている。p. 26, fn. 9 を参照。

観点から見れば黒であり、実際の〔業の〕観点から見れば黒であるゆえに。〔論拠 [a] が〕成立しないならば、『〔阿毘達磨〕集論』と矛盾するゆえに。

当該の問答で言及される、カールニカという名前の船長による悪人殺生は、大乘仏教経典『方便善巧経』（*Upāyakaṣṣyaśūtra*, UKS）がモチーフになっている。当該経典では、菩薩（船長）が、五百人の貿易商（被害者）と貿易商を殺害しようとしている強盗（加害者）の両方を救済する物語が説かれている²¹。おそらく、ガワンタシは、被害者と加害者の両者救済の考えを前提にして、問答を展開していると考えられる。

引用した問答において、船長による悪人殺生は善業として理解される。というのも、彼は悲という善性の動機によって、悪人を殺害しているため、その殺生は意思の観点から見ると白（悲）であり、実行の観点から見ると黒（殺生）の業になるからである。この回答者の発言に対して、質問者は次のように述べる。

དོན། མི་ནག་མཐུང་ཐུང་ཅན་དེ་དཔོན་སྤྱིང་ཇི་ཅན་གྱིས་བསང་པའི་ལས་དེ་ཚོས་ཅན། རྒྱལ་པོའི་ལས་ཡིན་པར་
ཐལ། རོ་བོ་ནག་པའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ན། (*rTen 'brel chen mo 142a1ff.*)

ならば、短剣を持った悪人を、カールニカという名の船長（*ded dpon snying rje can*）が殺害したというその業を主題とすると、[b]〔それは〕黒業であることになる。[c]〔それは〕黒い本性を有する業であるゆえに。

質問者は、船長が悪人を殺害するとき、その殺生は、黒い本性を有するため黒業すなわち不善業になると理解している。しかし、この見解も誤ったものである。これに対して、回答者は次のように返答する。

མ་ཁྲུབ། རྒྱལ་པོ་གྲུབ་སྟེ། རོ་བོ་ནག་ལ་རྣམ་སྤྲིན་དཀར་པའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། སྦྱོར་བ་ནག་ལ་
རྣམ་སྤྲིན་དཀར་པའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། བསམ་པ་དཀར་ལ་སྦྱོར་བ་ནག་པའི་ལས་ཡིན་པ་གང་ཞིག
ཁྲུང་འབྲུའི་ལས་དགེ་བ་ཡིན་པར་ཐར་བཤད་བྱིན་པའི་ཕྱིར། ཕྱི་མ་བསྐྱབས་བྱིན། དང་པོ་མ་གྲུབ་ན། ཀུན་བདུས་
དང་འགལ་ལོ། (*rTen 'brel chen mo 142a2ff.*)

【回答者】この時、〔論拠 [c] と帰結 [b] の間の〕論理的必然性は成立しない。論拠 ([c]) は成立する。[d] 黒い本性を有するが、白い異熟を有する業であるゆえに。[e] そうである（黒い本性を有するが、白い異熟を有する業である）ことになる。[f] 実行は黒であるが、白い異熟を有する業であるゆえに。[g] そうである（実行は黒であるが、白い異熟を有する業である）ことになる。[h-1] 意思は白であるが、実行が黒であり、なおかつ [h-2] そのような業は善であるとい前に説明した²²ゆえに。後者は既に成立している。第一〔の論拠〕が成立しないならば、『〔阿毘達磨〕集論』と矛盾する。

²¹UKS D 261, 303b4ff. を参照。当該経典には、チベット語訳 2 本、漢訳 3 本が伝わっている。内容や伝本などの詳細な情報については、Tatz 1994 や岡野 2011 を参照。

²²*rTen 'brel chen mo 140b5ff.*: ལས་དེ་དག་བསམ་པས་དཀར་ལ་སྦྱོར་བས་གནག་པའི་ལས་སུ་བཤད་པའི་ཕྱིར། ཀུན་བདུས་འགྲུབ་པ་
ལས། སྦྱོར་བ་ནག་ལ་བསམ་པ་དཀར་བ་ནི་དཔེར་ན་འགལ་ཞིག་སུ་འཕྲུལ་སྒྲོབ་པ་ལ་མི་ཕན་པ་བསྐྱོག་པར་འདོད་ཀྱང་ཕན་པ་ལ་ནི་སྦྱོར་བར་འདོད་
ཅིང་སྤྱིང་བཅེ་བའི་མེམས་ཀྱིས་ལྷས་དང་ངག་གིས་དྲག་དུ་བྱེད་པ་དེའི་ཚེ་ཀུན་རྣམས་ཉོན་མོངས་པར་འགྱུར་ལོ། ། ཞེས་གསུངས་པའི་ཕྱིར་ཏེ། ལུང་
འདི་དག་གིས་བསམ་པ་ཞེས་པ་རྒྱུའི་ཀུན་སྦྱོང་དང་སྦྱོར་བ་ཞེས་པ་དངོས་གཞི་ལ་བྱེད་པའི་ཕྱིར། གོང་དུ་འདོད་ན། དེ་འབྲུའི་ལས་དེ་དག་ཚོས་
ཅན། མི་དགེ་བའི་ལས་མ་ཡིན་པར་ཐལ། དགེ་བའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར། དེར་ཐལ། ལས་དེའི་སྦྱོར་བ་སྟེ་དངོས་གཞི་ནག་ཀྱང་རྒྱུའི་ཀུན་སྦྱོང་
དགེ་རྣམས་ཀུན་བསྐྱབས་པའི་དགེ་བའི་ལས་སུ་འཇོག་དགོས་པའི་ཕྱིར། (「それら業は、意思の観点では白業であるが、実行の
観点では黒業として説明されているゆえに。『〔阿毘達磨〕集論』註釈で、『実行は黒であるが、意思は白である
というのは、例えば、ある人が息子あるいは弟子を不利益から回避させようとしたり、利益に〔息子や弟子
を〕結びつけたいと欲して、悲の心を持ちながら身体と言葉を用いて暴力的なことを為すとき、彼はその
場限りでは汚されている。』と述べられているゆえに。これら教証によって、「意思」という語は原因として

回答者によれば、目下議論になっているカールニカという名前の船長による悪人殺生は、黒い本性を有するものの、結果的に白い異熟をもたらすため善業である。ここで、彼は「本性」(ngo bo) を実行と言い換え、実行が黒であっても白い異熟をもたらす業は善であるということを描いている。この理論は、当然のことながら『集論』に立脚したものであるが、『集論』とは若干異なるものである。拙稿（矢ノ下 2023: 169ff.）にて指摘したように、意思が黒く、実行が白い業、あるいは意思が白く、実行が黒い業は黑白業として理解される。さらに、この黑白業というのは、異熟も黑白であると定義されている²³。それゆえ、『集論』における一般的な黑白業の理論にしたがえば、船長による悪人殺生は黑白の異熟をもたらすものになるはずだが、回答者は白業として理解している。ただし、このことは、先に考察した『菩薩地』の記述を踏まえると整合的に理解することができる。すなわち、菩薩による悪人殺生は、確かに性罪であるが、それを遥かに上回るほどの福德を生み出すのと同様に、当該の船長による悪人殺生も殺生という悪性要素がその意思である悲という善性の要素によって圧倒されているため、白業となる²⁴。したがって、当該の殺生は、意思の観点から見れば白（悲）であるため、実行の観点から見た場合に黒（殺生）であっても、その業は白業すなわち善業として理解されるのである²⁵。一連の問答の分析から、ガワンタシ

の共起物を指し、「実行」という語は根本〔業道〕を指すゆえに。先ほどの帰結（不善業であることになる）に同意するならば、そのようなそれらの業を主題とすると、不善業ではないことになる。善業であるゆえに。そうである（善業である）ことになる。その業の実行すなわち根本〔業道〕が黒であっても、〔その業は〕原因としての共起物すなわち善根によって動機づけられた善業として措定されるはずであるゆえに。〕

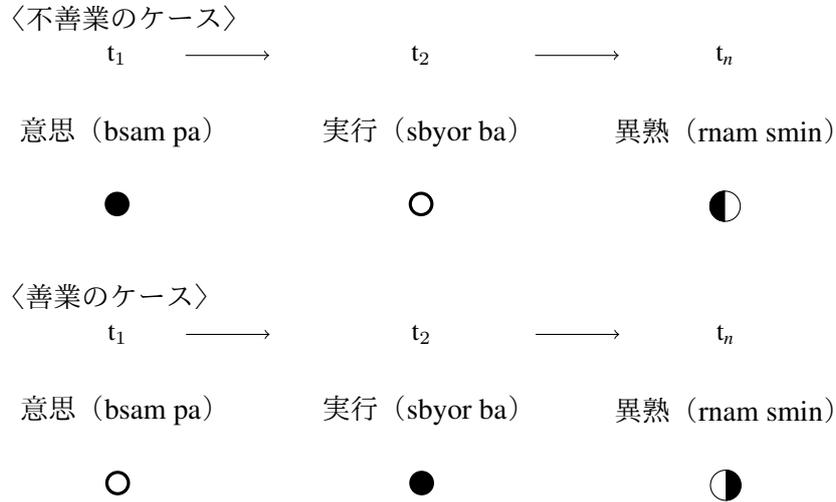
²³AS 234.19ff. を参照。

²⁴仏教において、自身が積んだ不善業を善業によって消滅させることは可能であるという見解と不可能であるという見解の二つがあり、さまざまな文献に確認される（榎本 1989; 平岡 2002: 254ff.; Gethin 2007: 77 を参照）。また、あわせて杉木 2020: 308ff. を参照。ガワンタシは不善業を善業によって根本から浄化することは可能であるという解釈を示している。その一つの例として、アジャータシャトウル王の父親殺生という無間業を根本から浄化可能か否かという問答を展開する。ガワンタシによれば、アジャータシャトウル王が父親殺生を犯した際、告白と節制 (bshags sdom) を行うことで、父親殺生という無間業は根本から浄化される。彼は、パーヴィヴェーカの『思摂炎』を根拠にそのような理解を示している。rTen 'brel chen mo 168a3ff.: ཁོ་མོ་གྱི་ལས་བཤགས་ལྷོ་མ་གྱིས་རྩ་བ་ནས་དག་པར་འདོད་པ་མི་འགྲུབ་པར་གསལ། མཚམས་མེད་ཀྱི་ལས་བཤགས་ལྷོ་མ་གྱིས་རྩ་བ་ནས་དག་པ་མེད་པའི་ཕྱིར། དེར་གསལ། རྒྱལ་བོ་མ་སྐྱེས་དགས་བཤགས་བཤམ་ཚུལ་བཞིན་བྱས་པས་ཕ་བསད་པའི་མཚམས་མེད་ཀྱི་ལས་མ་དག་པའི་ཕྱིར། དེར་གསལ། མ་སྐྱེས་དགས་ཕ་བསད་པའི་མཚམས་མེད་དེའི་དབང་གིས་དཔྱལ་བར་སྐྱེས་བར་བཤད་པས་ཕྱིར་ན་མ་བྱུང་གྱི་དེ་ལྟར་བཤད་པ་ཡོད་ཀྱང་དེའི་མཚམས་མེད་ཀྱི་ལས་རྩ་བ་ནས་དག་པའི་ཕྱིར་ཏེ། མ་སྐྱེས་དགས་མཚམས་མེད་དེའི་དབང་གིས་དཔྱལ་བའི་སྐྱུག་བཤལ་ཅུང་ཟད་ཅམ་ཡང་མ་སྐྱོང་བའི་ཕྱིར། བྱུང་གྱི་དཔྱལ་བར་སྐྱེ་བ་འཕེན་ཅེད་ཀྱི་ལས་བཤགས་པས་རྩ་བ་ནས་དག་ཚང་ནི། ལས་དེའི་དབང་གིས་དཔྱལ་བའི་སྐྱུག་བཤལ་ཅུང་ཟད་ཀྱང་སྐྱོང་མི་དགོས་པར་ལྷུང་བ་དེ་ཡིན་པའི་ཕྱིར། རྟོག་གོ་འབར་བ་ལས་སྐྱེ་བའི་ལས་རྣམས་ཀྱི་འབྲས་བུ་ལས་ལྷོ་མ་པ་དཔྱལ་བའི་སྐྱུག་བཤལ་ཉམས་སྐྱོང་བར་འགྲུབ་པ་ལས། གང་དག་གིས་དཔྱལ་བའི་སྐྱུག་བཤལ་ཕ་མོ་ཅམ་ཡང་ཉམས་སྐྱོང་བར་མ་ལྷུང་བ་དེ་ཉིད་ཤིན་ཏུ་རྩ་བ་ནས་ཕྱང་བ་ཇི་ལྟར་མ་ཡིན། ([質問者] 彼が次のように述べる。「[a] 定業を、告白と節制によって根源から浄化されるものとして認めるのは正しくないことになる。[b] 無間業に関して、告白と節制によって根源から浄化されるものはないゆえに。[c] そうであることになる。[d] アジャータシャトウル王が告白と節制を正しく行ったところで、父親殺しの無間業は浄化されなかったゆえに。[e] そうであることになる。[f] アジャータシャトウル [王] が父親殺しの無間業によって地獄へ転生したと説明されているゆえに。」【回答者】この時、〔論拠 [f] と帰結 [e] の間の〕論理的必然性は成立しない。そのような解釈はあるけれども、彼の無間業は根源から浄化されたものであるゆえに。アジャータシャトウル [王] はその無間業により、地獄の苦しみがわずかたりとも (cung zad tsam) も経験されることはないゆえに。論理的必然性は成立する。地獄への生をもたらす業が告白と節制によって根源から浄化されるという基準は、その業によって地獄の苦しみがわずかたりとも経験されなくてもよくなっていることである。『思摂炎』で、『諸罪業の結果が地獄の苦しみを経験することで完全に満たされた時、業は微細な地獄の苦しみをさえも経験することがないことになる。〔それは〕まさに、完全に根源から根絶されたものである。』) 善業による不善業の浄化については、別稿にて論じる予定である。

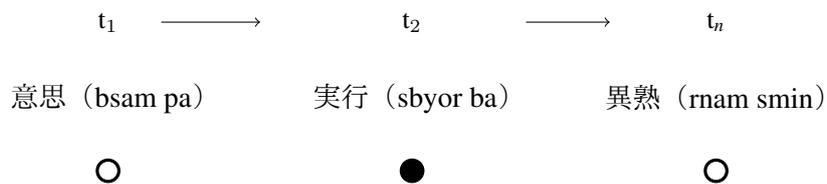
²⁵基本的には、意思が善性なものであれば、実行が悪性なものであっても、その業は善業として理解される。しかし、クンタン・テンペー・ダウンメ (Gung thang bstan pa'i sgron me: 1762–1823) が指摘するように、目下議論になっている悲を動機とした殺生については、動機が利他の心であっても、その殺生によって自分自身が福德を獲得するという思いを抱いてしまったら、その殺生は不善業になる。rTen 'brel lung rigs bang mdzod 20a3ff.: མན་སེམས་ཅམ་ཡོད་ཀྱང་དེ་བསད་པས་རང་གིས་བསོད་ནམས་འབྲེལ་སྐྱེས་ན་ལས་འབྲས་ལ་སྐྱོང་བ་པའི་མ་རྟོག་པས་

は、業の善、不善を確定する際、実行よりも意思の方をより重要な要素として理解していると言える。さらに、『集論』における黑白業とガワンタシの理解する悲を動機とした殺生を図式化すると以下のようなになる。

【表1：『集論』に立脚した黑白業】



【表2：悲を動機とした殺生】



3.2 対象を誤った殺生

以上、悲に動機づけられた殺生について考察を行った。ガワンタシは悲に動機づけられた殺生だけでなく、対象を誤った殺生についても問答を展開している。

བྱས་པ་ལ་ལོ་ན་རེ། མི་ནག་མདུང་ཐུང་ཅན་དེད་དཔོན་སྤྱིང་ཇེ་ཅན་གྱིས་བསང་པའི་ལས་དེ་ཚོས་ཅན། མི་དགེ་བའི་ལས་ལམ་ཡིན་པར་གྲུ། མི་བསང་པའི་ལས་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ན། (rTen 'brel chen mo 142a5ff.)

【質問者】以上の発言に対して、彼が〔次のように〕述べる。「短剣を持った悪人を、カールニカという名の船長が殺害する業を主題とすると、[a]〔それは〕不善業道であることになる。[b]人を殺害するという業であるゆえに。」

質問者は、あるものが人を殺害するという業であれば、それは必ず不善業道であるという論理的必然性が成立すると考える。しかし、この考えは、回答者によって否定される。回答者は次のように述べている。

ཀུན་ནས་བསྐྱངས་པས་མི་དགེ་བར་འགོ་བ་དཔེར་ན་དགེ་སྤོང་མ་སྤོང་མས་ཚོས་རྒྱན་བྱས་ཅུ་བསང་པས་ཕམ་པ་བྱུང་བ་ལྟ་བུ་ཡིན་པའི་ཕྱིར། ((ある者に)「利他の心 (phan sems) だけがあっても、彼を殺害することによって自分自身が福德を獲得するだろうと考えるならば、業果に対する無知である無明によって動機づけられているので、〔その殺生は〕不善になってしまう。例えば、パーリター (skyong ma) という〔名前の〕比丘尼が六十人の盗賊を殺害したために、波羅夷が発生するのと同様であるために。))

道すなわちデーヴァダッタを殺害しようという意思のもと、デーヴァダッタを殺害するという殺生業道にはならないのであって、殺生という業は発生しているということであると考えられる²⁸。というのも、ある人がヤジュニヤダッタを殺害してしまったことは、それが誤認殺生であれ殺生という業は発生しているからである。ガワンタンシは明言していないが、彼の与える問答は、以下の『俱舍論本頌』における殺生業道の定義を意図したものであると考えられる。

AK IV.73ab: *prāṇātipātāḥ saṃcintya parasyābhrāntimāraṇam |*

「殺生〔業道〕とは思った通りに、他者を誤ることなく殺害することである。」²⁹

この定義を踏まえると、ある人がデーヴァダッタを殺害しようとする意図に動機づけられて、デーヴァダッタを殺害した時に初めて、殺生業道が成立するということになる。それゆえ、当該の問答における、ある人によるヤジュニヤダッタ殺生は、ある人に、殺生動機と殺生対象が整合した殺生業道という罪が発生することはないが、殺生という業は発生しているのである³⁰。ガワンタンシが強調する「業道」の意味するところは、デーヴァダッタ殺生意思（意業）によって、踏まれる場所となる道（殺生業）、いわゆる所行としての業道のことである³¹。つまり、回答者が意図しているのは、目下のケースにおいて、たとえ殺生という業が発生していても、それが殺生動機と殺生業の間に一本の道が開通することにはならないということである³²。

目下の問答において、ガワンタンシは殺生意思と実際の殺生業の間に因果関係が成立するか否かを論じているだけであり、それ以上のこと、すなわち殺生業を犯した加害者がその後いかなる異熟を経験するかといったことなどは論じていないことには注意すべきである。

²⁸業と業道の関係について、ヴァスバンドゥは次のように述べている。AKBh 248.4ff.: *sapta tu prāṇātipātādayaḥ karma ca kāyavākkarmatvāt karmaṇas ca panthāna iti karmapathās tatsamutthānacetanāyās tān adhiṣṭhāya pravṛtter iti |*（「七項目は業でありかつ業道でもあるので業道でもある。〔それらが業である理由は、〕身業ないし語業であるから。〔それらが業道である理由は、〕業の通り道（*karma-patha*, 第六格限定複合語）であるから。〔それらが業道である理由は、〕それら（身業ないし語業）の共起物である思が、それら（身業ないし語業）を支配した上で発動するからである。」）

²⁹AKBh 243.13ff.: *yadi marayiṣyāmy enam iti samjñāya paraṃ mārayati tam eva ca mārayati nānyam bhramitvā | iyatā prāṇātipāto bhavati |*（「もし、私がこの者（*x*）を殺害しようと考えてから、相手（*x*）を殺害するならば、すなわちそれ（*x*）以外の者（*y*）と誤認することなく、他ならぬその人（*x*）を殺害するならば、この限りの条件によって、殺害が成立する。」）

³⁰Cutler (ed.) 2000: 397, n.381 によれば、当該の殺生は殺生を犯した当事者に否定的な影響力をもたらす。ただし、そのように述べる根拠は明確ではない。Cutler (ed.) 2000: 397, n. 381: “When Tsong-kha-pa says “there is no actual sin,” he is saying that there is no complete infraction with all its aspects fulfilled. The action will still give rise to negative effects for the perpetrator.”

³¹「業道」は、所行としての業道と能通としての業道の二つの意味で理解されている。所行の意味での業道については、『成唯識論』の記述が参考になる。『成唯識論』T 1585, 5a5: 思所履故説名業道。能通の意味での業道は、『俱舍論』に次のように説かれている。AKBh 248.10ff.: *ye tarhi dārṣṭāntikā abhidhyādīn eva manaskarmecchanti teṣāṃ te kathāṃ karmapathāḥ | te eva hi praṣṭavyāḥ | api tu śakyam vaktum karma ca te panthānās ca sugatidurgatīnām iti karmapathāḥ | itaretarāvāhanād vā |*（「もしそうであるならば、譬喩師たちが、まさに貪欲などを意業として認めるとき、それは、彼らにとってどうして業道であるのか。実に彼らこそが、質問されるべきである。あるいは、〔次のように〕説明することも可能である。〔すなわち、〕それら〔貪欲など〕は、業でありかつ道である。なぜなら、善、悪に通ずる道であり、あるいは、〔貪欲などは〕相互に影響を与えるという〔二つを〕理由に、業道である。」）

³²ガワンタンシによれば、反対に、不善なる殺生という業道が発生していないからといって、それは殺生という業が発生していないということにはならない。*rTen 'brel chen mo* 142b5ff.: ཁོ་ནེ། དེ་ལ་སློག་བཅད་པའི་ལས་མ་བྱུང་བར་གྱལ། དེ་ལ་སློག་བཅད་པའི་ལས་ལས་མི་དགོ་བམ་བྱུང་པའི་ཕྱིར་ན་མ་ཁྱུང།（「彼が次のように述べる。『[k] 彼に殺生業は発動しないことになる。[l] 彼に殺生という不善業道が発生していないゆえに。』この時、〔論拠 [l] と帰結 [k] の間の〕論理的必然性は成立しない。」）

4 小結

1. 『菩薩地』や『思釈炎』で言及されているように、本来ならば性罪である殺生でも、菩薩が巧みな方便として、悲に動機づけられて行う殺生であれば、菩薩が違犯者になることはなく、むしろ彼には多くの福德が生じる。特に、『菩薩地』で言及されているように、当該の殺生行為は、菩薩にとって義務的行為である。
2. ガワンタシによれば、悲を動機とした殺生は、意思が白で、実行が黒であり、結果的に白い異熟をもたらすため、善業として理解される。つまり、殺生という悪性の要素が、悲という善性の要素によって圧倒されるため、その業が善業であるという理解が成立するのである。
3. ガワンタシによれば、ある人がデーヴァダッタを殺害しようとして、誤ってヤジュニャダッタを殺害してしまった場合、その人には、殺生対象の識別と殺生業が整合する殺生業道という罪が生じることはない。この場合、ある人にはデーヴァダッタを殺害しようとする意思はあるが、ヤジュニャダッタに対する殺生意思はないため、意思と実際の殺生業が一つの道としてつながることはない。ただし、あくまでも殺生業道が発生していないのであって、ヤジュニャダッタ殺害という業は発生していると考えられる。

菩薩による悪人殺生は、菩薩が善心、あるいは無記心、さらには憐れみの心を動機とする行為である。それゆえ、悪人殺生を実行した菩薩が違犯者となることはない。また、『菩薩地』によれば、当該の殺生業は菩薩にとって義務的行為であり、そのような義務的行為を実行している者にとって、その行為が違犯となることは理に合わないのである。

このことは、ガワンタシも問答において強調しており、彼の見解が示唆するのは、業の善あるいは不善を決定する最大の要素は、意思である。それゆえ、菩薩による悲を動機とする殺生は、その殺生にはたらきかける意思が善性であり、結果的に白い異熟をもたらすことになるため、善業となる。さらに、対象を誤った殺生について、ある人にはデーヴァダッタに対する殺生意思はあったが、ヤジュニャダッタに対する殺生意思はなかったため、その人に、デーヴァダッタへの殺生意思に踏まれる場所となる殺生業道（所行としての業道）が発生することはない。しかし、あくまでも殺生対象の識別と整合した形での殺生業道が発生していないだけであり、殺生という業は発生していることには注意を払わねばならない。

『縁起大論』において、ガワンタシは、意思こそが業の善、不善の決定要因や業道成立要因であるという仏教業思想の本質が、殺生という事例においても例外なく成立することを強調しているのである。したがって、彼は、殺生という主題をめぐる問答を展開することによって、殺生の肯定や、倫理的価値判断を与えるということを問題としているわけではない。

略号と文献

(1) インド撰述文献

AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu). See **AKBh**.

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): P. Pradhan ed. *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1975.

AS *Abhidharmasamuccaya* (Asaṅga): see Bayer 2010.

ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (Jinaputra): N. Tatia ed. *Abhidharmasamuccaya-Bhāṣyam*. Tibetan Sanskrit Works Series 17. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1976.

UKS D *Āryaupāyakaśalyānāmamahāyānasūtra*: Tibetan Sde dge ed. *mDo sde*. Za. Tohoku No. 261.

TJ D *Tarkajvālā* (Bhāviveka): Tibetan Sde dge ed. *Bdu ma*. Dza. Tohoku No. 3856.

BBh *Bodhisattvabhūmi*: U. Wogiwara ed. *Bodhisattvabhūmi. A Statement of Whole Course of the Bodhisattva*. Tokyo. 1930.

BBh D *Bodhisattvabhūmi*: Tibetan Sde dge ed. *Sems tsam*. Wi. Tohoku No. 4037.

BBhV D *Bodhisattvabhūmivyākhyā*: Tibetan Sde dge ed. *Sems tsam*. Yi. Tohoku No. 4047.

(2) チベット撰述文献

Byang chub gzhung lam *Byang chub sems dpa'i tshul khriims kyi nam bshad byang chub gzhung lam* (Tsong kha pa blo bzang grags pa): Zhol ed. Ka.

rTen 'brel chen mo *Zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba'i mtha' dpyod legs par bshad pa'i rgya mtsho* (bSe ngag dbang bkra shis): Ulan Bator ed.

rTen 'brel lung rigs bang mdzod *rTen 'brel gyi nam bzhag lung rigs bang mdzod* (Gung thang dkon mchog bstan pa'i sgron me): Bkra shis 'khyil ed. Ga.

Lam rim chen mo *Khams gsum chos kyi rgyal po tsong kha pa chen pos mdzad pa'i byang chub lam gyi rim pa chen mo* (Tsong kha pa blo bzang grags pa): Zhol ed. Pa. Tohoku No. 5392.

(3) 漢文文献

成唯識論 成唯識論（玄奘譯）：T. No. 1585. Vol. 31.

菩薩地 瑜伽師地論菩薩地（玄奘譯）：T. No. 1579. Vol. 30.

(4) 欧文・和文資料

Bayer, Achim

2010 *The Theory of Karman in the Abhidharmasamuccaya*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

Cutler, Joshua (ed.)

2000 *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment*, 1. Ithaca: Snow Lion.

Deleanu, Florin

2019 “Dating with Procrustes: Early Pramāṇavāda Chronology Revisited” (Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies 2). *International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

Eckel, Malcolm David

2008 *Bhāviveka and His Buddhist Opponent*. Cambridge: Harvard University Press.

Gethin, Rupert

2007 “Buddhist monks, Buddhist kings, Buddhist violence. On the early Buddhist attitudes to violence.” In *Religion and Violence in South Asia: Theory and Practice*, eds. John R. Hinnels and Richard King (pp. 62–82). London and New York: Routledge.

Harvey, Peter

2000 *An Introduction to Buddhist Ethics: Foundations, Values and Issues*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jenkins, Stephen

- 2010 “Making Merit through Warfare and Torture According to the *Ārya-Bodhisattva-gocara-upāyaviṣaya-vikurvaṇa-nirdeśa Sūtra*.” In *Buddhist Warfare*, eds. Michael Jarison and Mark Juergensmeyer (pp. 59–75). Oxford: Oxford University Press.
- 2011 “On the auspiciousness of compassionate violence.” *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 33 (1-2): 299–331.

Schmithausen, Lambert

- 1999 “Aspects of the Buddhist Attitude towards War.” In *Violence Denied: Violence, Non-Violence and the Rationalization of Violence in South Asian Cultural History*, eds. Jan E.M. Houben and Karel R. Van Kooij (pp. 45–67). Leiden: Brill.

Sugiki, Tsunehiko

- 2020 “Compassion, Self-Sacrifice, and Karma in Warfare: Buddhist Discourse on Warfare as an Ethical and Soteriological Instruction for Warriors.” *Religious*, 11 (2): 1–22.

Tatz, Mark

- 1986 *Asaṅga’s Chapter on Ethics with the Commentary of Tsong-Kha-Pa, the Basic Path to Awakening, the Complete Bodhisattva*, Studies in Asian Thought and Religion, 4 vols. Lewiston: Queenston.
- 1994 *The Skill in Means (Upāyakauśalya) Sūtra*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Yanoshita, Tomoya

- 2024 “Ngag dbang bkra shis’s View of Killing.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 72 (forthcoming) (3).

榎本文雄

- 1989 「初期仏教における業の消滅」『日本仏教学会年報』54: 1–13.
- 2013 『不殺生（アヒンサー）の動機・理由—インド仏教文献を主資料として—』RINDAS 伝統思想シリーズ 14, 龍谷大学現代インド研究センター

岡野潔

- 2010 「釈尊が前世で犯した殺人：大乘方便経によるその解釈」『哲学年報』69: 139–175.

清水俊史

- 2017 『阿毘達磨仏教における業論の研究—説一切有部と上座部を中心に—』大蔵出版

杉木恒彦

- 2018 「インド大乘仏教経典に見られる刑罰・戦争論—十善はどのようにして王政として展開されるのか—」『東洋学術研究』181: 2–25.
- 2020 「戦士の宗教—インド仏教の戦争論の俯瞰からの試論—」『越境する宗教史 上巻』所収 (pp. 295–331) LITHON

羽田野伯猷

- 1988 「瑜伽行派の菩薩戒をめぐる」『チベット・インド学集成 4 インド篇 II』所収 (pp. 137–180) 法蔵館

平岡聡

- 2002 『説話の考古学—インド仏教説話に秘められた思想』大蔵出版

平川彰

- 1993 『二百五十戒の研究 I』（平川彰著作集 14）春秋社

藤田光寛

- 1977 「瑜伽師地論菩薩地戒品に対するチベット語訳註釈書, 最勝子註と海雲註をめぐって」『密教文化』118: 96-80.
- 1990 「〈菩薩地戒品〉和訳(II)」『高野山大学論叢』25: 127-147.
- 1991 「〈菩薩地戒品〉和訳(III)」『高野山大学論叢』26: 21-30.
- 1995 「〈菩薩地戒品〉に説かれる「殺生」について」『密教文化』191: 136-152.
- 1999 「瑜伽戒における不善の肯定」『日本仏教学会年報』65: 107-125.

藤田宏達

- 1976 「原始仏教における悪の観念」『悪 仏教思想2』所収(pp. 115-156) 平楽寺書店

舟橋一哉

- 1954 『業の研究』法蔵館
- 1987 『俱舍論の原典解明 業品』法蔵館

船山徹

- 2020 『菩薩として生きる シリーズ実践仏教I』臨川書店
- 2023 『梵網経の教え 今こそ活かす梵網戒』臨川書店

矢ノ下智也

- 2023 「黒白業をめぐるガワンタシの見解」『比較論理学研究』20: 167-180.

(やのした ともや, 広島大学大学院博士課程後期・日本学術振興会特別研究員 DC1 [インド哲学])

Ngag dbang bkra shis's View of Killing

YANOSHITA Tomoya

The aim of this paper is to analyze the debate about compassionate killing and unintentional killing in *rTen 'brel chen mo* and to clarify Ngag dbang bkra shis's (1678–1738) understanding of killing.

Killing is described as one kind of the ten unvirtuous karma in Buddhism. One must avoid killing because it brings about the transmigration into the unhappy realm. However, in some Buddhist scriptures, we can find examples where killing is allowed in specific cases. Asaṅga (ca. 330–405), in his *Bodhisattvabhūmi*, states that if a Bodhisattva, motivated by compassion (*karuṇā*), kills a robber who is engaging in the sin of immediate retribution, the Bodhisattva is not sinful, and in fact, much merit is brought forth. This type of killing (hereafter “compassionate killing”) is the action that the Bodhisattva should perform. This idea is widely accepted in Mahāyāna Buddhism, as shown in previous studies.

With regard to a Bodhisattva's compassionate killing as a skillful means (*upāyakauśalya*), Ngag dbang bkra shis, in his *rTen 'brel chen mo*, states that this type of killing falls into the category of virtuous karma (*dge ba'i las*) as long as it is motivated by white intention (*bsam pa*, **āśaya*), bringing about a white fruition. His idea is based on the theory of black-white karma provided in Asaṅga's *Abhidharmasamuccaya*. Moreover, Ngag dbang bkra shis provides a debate about unintentional killing. The point here is that Ngag dbang bkra shis clearly distinguishes unvirtuous karma (*mi dge ba'i las*, **akuśalakarma*) and unvirtuous way of karma (*mi dge ba'i las lam*, **akuśalakarmapatha*). The latter is established through the correspondence between actual karma and intention, while the former is not always established through the correspondence between them. For example, when one aims to kill only Devadatta and then unintentionally kills Yajñadatta, misunderstanding him to be Devadatta, one does not generate an unvirtuous way of karma. However, this does not mean that this person does not generate unvirtuous karma. Although the person kills Yajñadatta, his original intention was to kill Deavadatta, not Yajñadatta. Considering this, when the person kills Devadatta motivated by the intention to kill Devadatta, an unvirtuous way of karma is established. Ngag dbang bkra shis's idea, which is based on his reading of Tsong kha pa's (1357–1419) *Lam rim chen mo*, is keeping in line with the definition of killing given by Vasubandhu in his *Abhidharmakośa* IV.73ab. Thus, it can be concluded from Ngag dbang bkra shis's debate, that the categorization of karma as being virtuous or unvirtuous, as well as the establishment of a way of karma, are determined by its intention.